

## 私と企業家研究

—企業家研究フォーラム 冬季部会・大会—

2008年12月13日 東京、法政大学ポアソナードタワー

清成 忠男 (Tadao KIYONARI)

法政大学 学事顧問

清成でございます。

私は、企業家を何か正面からといいたいでしょうか、まともに研究しているわけではないのであります。企業家研究を私が始めたきっかけは、これは後で申しますけれども、大塚史学とのかかわりが発端であります。経営学というのは、私もほとんど関心がなかったんですが、法政の経営学部にきましたら、森川学部長から、経営学総論というのを講義しろと言われて、まあ困った。私は学生のときに経営学は取っておりません、だからできませんと言いましたら、森川さんから、君は自分を学部長にするときに1票を投じたんだらうと言うから、はいと言ったら、だったらおれの言うことを聞くべきだと(笑声)言われて、まあ仕方なく引き受けました。

とにかく、経営学のいろいろ文献を見ても、やはり教科書類、そのときに随分当たったのですけれども、やはり企業家研究というような視点からは、戦後日本の経営学というのは必ずしもとらえられていなかった。したがって企業家研究は、経営史学会とか、あるいは経済史とか、そういう視点からの研究が中心だったんだらうと思うんですね。ただ、シュンペーターの企業家論を翻訳したときに、いろいろ企業家研究の広がり調べてみましたら、大変多岐にわたっているということで、例えば社会学とか心理学とか政治学ということまで含めて、いろいろ多岐にわたっているということもわかっ

たわけであります。私は、それをきちんと整理して体系化して研究したわけでも何でもないということになるわけであります。

この2番目のところに「日本特殊産業の展相」というのを書いてありますけれども、多分皆さん、この本のことはご存じないと思います。昭和18年、1943年に出た本であります。この本が企業家研究の1つのきっかけに私にはなっているんです。昭和50年代の後半、たまたま東大の教養学部でゼミを持っていたことがあって、学内で中村隆英先生とすれ違いました。そのときに呼びとめられて、「君、『日本特殊産業の展相』という本、読んでるだらうね」と言われたんですね。私は「いや、その本の存在も知りません」と言ったら、叱られまして「だめじゃないか」と。これはサブタイトルは「伊予経済の研究」となっているんですね。

松山高商の創立20周年記念論文集で、編者が賀川英夫という人なんです。その中村先生に、では賀川さんというのはどういう方なのかと伺っても、「いや、僕はよく知らないよ」とおっしゃっていましたが、後に松山商大の方に伺ったら、松山高商の教授から台北の帝大の教授になられて赴任するときに、昭和19年です、船が沈められて亡くなった。この編者が亡くなったものですから、戦後もその本自体がもう消えてしまうような感じなんです。これは今の愛媛県の地場産業の歴史ですね。戦時中の企

業整備の中で資料が散逸するというので、賀川先生が中心となって資料を集め、手分けして、地場産業の歴史を書いたんですね。これを見ますと、地域の中から企業家が出てきて、イノベーションを展開している。伊予絨とか、今治のタオルとか、いろんな事例が豊富に挙がっております。

中村先生の書かれた本の中にも、「日本特殊産業の展相」というのは紹介されていますけれども、特殊産業とは何かという話なんですね。日本の明治以降のメインの産業に対して、いわゆる地場産業が主流ではない特殊なものということから、特殊産業という言葉が使われたようです。やはり財閥系、あるいは新興財閥の産業に比べて特殊なものだと。しかし、この地場産業は大変な広がりを見せていて、地場産業製品の輸出、それで外貨を稼いで資源とか工作機械を輸入していたわけですから、別に特殊産業などと言う必要もないと思いますけれども、とにかく日の当たらない産業というイメージで紹介されていたのです。やはり日本の土着の企業家の活動が紹介されていたという、これが私の研究の1つのきっかけになった。

それからもう1つ、企業家養成コース、これは法政が1992年に経営学部で夜間大学院をスタートさせたときに、企業家養成コースというのをつくりました。これは我が国の第1号になります。

それを教授会で出したときに、積極的な賛成意見は、なかったように思います。反対者がいなかったのは実はできたのです。これはまあ法政のいいところなんですね。あいつがやりたいと言うなら、まあやらせてやろうということですね。

実はこれの発端は、1984年でしたか、アルバハ教授が中心となって、ドイツの経営経済学会の大会がボン大学で開かれて、その年のテーマが「中小企業の経営経済学」だったのです。その前の年にアルバハさんから、報告をしてくれと頼まれました、そのときに、日本の中小企業のスタートアップ、創業の状況というのを報

告したんです。私のカウンターパートで報告した方がアメリカのヒルさんという教授でした。「アメリカのビジネススクールにおける企業家養成コースについて」というテーマで話されて、当時のアメリカでは、経営大学院で240校ぐらいが企業家養成コースを開いていたのです。日本は皆無であったということ。しかし、皆無であったというのはもちろんそれは理由のあることであって、日本では必要がなかったということです。日本の中小企業の経営者の養成機関というのは、中小企業そのものだったんですね。

したがって、まず中小企業に勤めて、そして、渡り歩いて技術なり経営のノウハウを覚えて独立するというのが日本のパターンだったのです。それから、大企業から独立するという例はまだなかったわけですから、そういう意味では企業家養成コースというのはなかったのです。しかし、どうも90年代になると必要だろうということで、これを立ち上げたわけですね。学生の志願状況を見ると、企業家養成コースが大変多かったということと、その後、各大学で設置し始めたということでもあったわけですね。

そういうことで企業家に関心を持ち、そして、イタリアに2年続けて1カ月ずつ滞在して、イタリアの企業家をいろいろ調べるといってもやったわけでありまして。その辺から、少し企業家論についてシュンペーターのものを翻訳してみようと思い立って、手をつけたわけでありまして。

そこで、本題に入りますけれども、私に企業家研究のきっかけを与えてくれたのは大塚史学です。私は終戦の年、昭和20年に旧制中学に入っているわけですが、都立十五中というところに入りました。もう空襲下ですから、家から近いところに行けということで、偶然そこに入ったわけですが、そこに、沢登先生という変わった校長がいて、一高を裏表で卒業して東京帝大を出たという方で、したがって人脈が豊富であると。その人脈の中に中野好夫さんがいて、中野好夫さんが戦争中に東大文学部の英文科の助教授をやっておられたのです。

ところが、戦時中に治安維持法違反で逮捕された東京帝大の学生たち、これはもうどこでも雇用してくれない。転向して出てくるわけです。それを沢登先生が、中野好夫先生の紹介で採用したんですね。こういう先生が五、六人いて、この先生たちが戦後一斉に、自分たちの戦争中の転向というのは偽装転向だったということで、非常に活発な教育を始めるわけです。旧制中学がそのまま新制高校に切りかわる。すると、旧制中学5年ですけども、新制高校は新制中学と合算して6年ですね。しかし、授業内容はほとんど変わらない。つまり1年間、新制で間延びするんです。その間延びした期間は受験勉強するな。戦争中に治安維持法違反で逮捕された先生たちが、旧制高校の教養教育をやるんだと。したがって、新制高校の2年生に、大塚先生の『近代欧州経済史序説』だとか、大河内先生とか清水幾太郎先生とか、こういう人たちの本を読ませるのです。『螢雪時代』などというのを読んでいると叱られるんですね。(笑声) ばかなことをすると言われてですね。そういう時代であったということで、ですから、我々は新制高校の2年生のときに、もう大塚先生の手書に接していた。十分に理解したとは到底思えないわけでありませぬ。

それで、大学に入ったら大塚史学をやりたいと思っていたということ、それから大分後になっての話ですけども、実は大塚史学の形成というのは、私は法政大学発だったのではないかと思います。大塚先生のカウンターパートで議論したのが戸谷敏之さんなんですね。戸谷さんと大塚先生の年齢差はわずか5歳なんです。大塚先生は亡くなられるちょっと前に、岡田与好さんにこう言われたそうです。自分は戸谷君を尊敬していたと。弟子を尊敬していたと。実は戸谷さんは、旧制一高を卒業して、そして旧制の東京帝大の経済学部の入試に合格していたのです。ところが、その年3月末に治安維持法違反で逮捕されて、一高の卒業が取り消され帝大の入学が取り消されてしまったんです。それで戸谷さんは、当時一番リベラルな大学はどこ

だということで調べたら法政だったと。三木清、戸坂潤、こういう人たちがいたんですね。それで法政に入られて、それで小野武夫先生という日本経済史の先生のゼミに入られたのです。

ところが、小野先生は、大塚先生に1年預けたんですね。フェース・ツー・フェースで議論をして、そして戸谷さんは、『経苑』という法政の経済学部の学生雑誌に「イギリス・ヨーマンの研究」というのを書かれました。これは非常に水準の高いもので、戦後、大塚先生が戸谷さんの死を悼んで出版されたんですね。私は大学に入ってから二、三年後だったのですが、この本を読んで非常に啓発されたという記憶があります。経済主体としてのヨーマンを取り上げているわけです。どうも大塚史学の形成にとって戸谷さんというのは、全く不可欠の人物だったんじゃないかと思えます。当時、大塚先生は法政の経済学部の助教授だったものですから、法政でこの2人が出会って議論をしたということですね。

それから、戸谷さんが治安維持法違反で逮捕されて本富士警察署に留置されたときに、同じ留置場にもう1人、一高生が逮捕されて入ってきたんですね。それが丸山真男さんだったのです。丸山先生は後年、本富士警察署の留置場で戸谷さんからいろいろと研究上の示唆を受けたと言っておられたようであります。これは、昨年まで法政にいた飯田泰三さんが、丸山先生から直接聞かれたということなんです。

とにかく戸谷さんというのは大変な人だったんですが、私が法政大学の総長になって二、三年のころでしょうか、戸谷富之さんという方から突然手紙をいただいて、『イギリス・ヨーマンの研究』再版を送っていただきました。それと、日本の農業に関する戸谷敏之さんの分厚い書物、これも送っていただきました。実は、戸谷敏之さんの弟さんが富之さんなんです。北海道大学の教授で化学の先生だったのです。兄弟の往復書簡というのがあるとか、それから、敏之さんの遺品が大分残っているんですね。それを私に預けたいという、こういうお手紙をい

いただきました。

そのことから、戸谷敏之さんについていろいろ調べました。調べましたら、図書館に『イギリス・ヨーマンの研究』の、これは学生雑誌に載ったものですが、原稿用紙に書いた原稿まで見つかったんですね。それと同時に、「イギリス・ヨーマンの研究」を書かれたのが昭和13年ですが、翌14年に「日本農業における新結合の遂行」というのを書かれています。これも学生のときに書かれているんですね。だから、旧制の法政の経済学部2年のときにヨーマンを書いて、3年のときに新結合を書いているわけです。そして、ドイツ語が抜群にできたということで、戦時中、日本駐在のドイツ大使からいろいろ表彰されて、表彰状とか、そのときに記念品でもらったものがあって、それを弟さんがずっと持っていて、それを私に預けたいと言ってこられたのです。

私は札幌に行きまして、弟さんご夫妻にも会ったわけですが、往復書簡を見て、いろんなことがわかりましたけれども、その後で、私がシュンペーターの翻訳を出すというので、法政の図書館にあった『経済発展の理論』を借り出しました。そうしましたら、鉛筆で線が引いてあって書き込みがたくさんありました。それが実は戸谷さんの筆跡だったんですね。それから、鉛筆で棒線の引いてあるところというのはほとんど、私に関心を持ったところと全くオーバーラップしているんですね。これにもちょっとびっくりしたのですけれども、とにかく戸谷さんの評価をもう一回ちゃんとやる必要があるんじゃないかと、これは現在でもまだ思っているわけがあります。

学生のときには、高橋幸八郎先生のゼミに私はおりましたが、実は戸谷敏之さんと高橋幸八郎さんとは一高の同級生なんです。この高橋先生は、戦時中に大塚先生が東大に移られて、その後を受けて法政の経済学部で西欧経済史を高橋先生が持っておられたのです。そしてその翌年、京城帝大の助教授で移られたわけですが、それで、実は戸谷さんと高橋先生

の間にまたいろいろ連絡事項があったわけです。それは戸谷富之さん、戸谷敏之さんの弟さんに縁談があって、相手は京城帝大の教授の娘であるということ、それで戸谷敏之さんが高橋先生に、どんな娘か調べろということで、調べたんですね。大変いい娘さんであるという回答が返ってきて、それで結婚されたのだそうです。それは私は戸谷富之さんの奥さんからじかに聞いて、実はびっくりしたわけでありました。とにかくそういう関係がいろいろ錯綜していたということと、それから、大塚史学の形成については、大塚先生、高橋先生、松田先生が東大のキャンパス内で議論したといったような記録がいろいろあるようですね。それはそうですが、発端はやはり、大塚、戸谷というところで大塚史学というのは形成されたのではないかという感じがするわけです。そういうことで、大塚先生は戸谷さんを尊敬していたということだと思います。

私は高橋ゼミでドイツ経済史をやっていたものですから、それで、松田先生がドイツ経済史ご専門ということでいろいろお世話になり、昭和39年に松田先生と京都大学の野英二先生が「ドイツ資本主義研究会」をつくられて、これは形を変えて現在でも残ってはいるわけですが、そのメンバーとして、実は松田先生が亡くなるまでいろいろおつき合いをしたのです。

そういう意味で、大塚史学は経済主体ということに焦点を当てたということですね。それから、経済主体ということになりますと企業家、そのエートスは一体何だったのかと、この辺はマックスウェーバーでありますとか、ヨーロッパの宗教論争というのと実はつながってくるわけがあります。そういうことで、私の企業家研究の背後にずっとあったのが大塚史学であったということですね。

それから、いろんな先輩に恵まれたわけですが、実は大塚先生の長男の大塚和彦君は、通産官僚だったのですが、非常に優秀な人で、私は、彼は研究者になればよかったのと思っ

ているわけですが、やはりお父様と比較されるというのが嫌で、研究者にはならなかったようです。

それで、大塚先生のところに隅谷三喜男先生がしばしば出入りされていて、そこに息子さんの和彦君というのがいて、そういうことがあって、中小企業政策審議会で新しい政策策定をやりたいという、既存の政策でいろいろ問題があるということになって、だれに頼んだらいいかということを経谷先生に相談されたらしいんですね。隅谷先生が私を推薦されたということで、審議会の委員になりましたら、委員仲間に中村隆英先生がいらっちゃった。中村先生は統計をもとに客観的に中小企業の評価をされるわけにありますけれども、しかし、やはり経済主体にも非常に関心をお持ちであったということと、それから、従来の中小企業研究者が指摘していなかったような、統計的な発見というのが随分あったんですね。それは、審議会の過程で、随分中村先生から教えられたということがあるわけでありまして。

それから、隅谷先生については、後のベンチャービジネス論のベースになった、東京における新規の創業の研究ですね、企業家がスタートアップするその研究、その実態調査をやったわけですね。その調査結果を隅谷先生に評価していただきたいということで、電話を差し上げました。隅谷先生とは当時面識が全くなかったのですが、電話しまして、清成という者だと言ったら、大変意外なことに、君のものはほとんど読んでるよということで、その座談会には出るよと。あと、だれが出てくるのかいと言うから、いや、中村隆英先生にお願いしてありますということで、あと長幸男先生にもお願いしたんですね。それで座談会をやった経験がありまして、それ以降、隅谷先生には、研究上のことでもいろいろご示唆を受けたということだったわけでありまして。

それから、馬場正雄先生とは、公正取引委員会の独占禁止懇話会のメンバーだったんですね。それで非常に話が合ったということと、そ

れから、公取で京都に出張したことがあるんです。それで、馬場さんと一晩、時間をとって懇談する機会があって、馬場先生がそのころ、日経の「やさしい経済学」に「企業家とは何か」というのを書かれていたんですね。馬場先生が企業家論に関心を持っているということも知りまして、そのときに馬場先生がおっしゃったのは、ハーバードビジネススクールの本屋に行ったら、アントレプレナーシップのエンサイクロペディアが出ていたというんですね。今思うと、あれを買っておけばよかったとおっしゃるから、いや、私を買って持っていますということをおし上げて、じゃ、今度見せてよという話になったんですが、その後間もなく、馬場先生は亡くなられてしまった。その馬場先生からもいろいろ、経済理論的に見た企業家とは何ぞやというお話を伺ったりしたということと、それから、私が法政に来たころは、経済学部で伊東光晴先生がおられたということで、伊東先生とは随分一緒に、地場産業の産地について講演を頼まれるというので、2人でペアになって行ったことがあります。それは、伊東先生が紛争のときに外語大の教授を辞めてしまって、フリーだったんですね。食えないから講演を引き受けたと。ドルショックのときなんですね。そうすると、ドルショックと日本経済という話はできるけれども、ドルショックと地場産業という話になると僕にはできない。だから、君、つき合えよという話で、随分一緒に行ったことがありますが、伊東先生が最初に言われたのは、君の中小企業論というのは、ベースは大塚史学だろうということですね。伊東先生とは今日に至るまでまだいろいろと交流があります。こういう先達にいろいろ教えられたということですね。

それから、共同研究者としては、ベンチャー企業論では中村秀一郎先生ですね。昨年亡くなられました。私が中村秀一郎さんの存在を知ったというのは、昭和二十七、八年でしょうか。東大に入って西欧経済史をやりたいと、大塚史学を勉強したいというときに、神田の古本屋に『大塚史学批判』という本があったんですね。

昭和23年に出た本です。それを見ましたら、服部之総、それから井上清、豊田四郎ですね。豊田さんなどは当時の日本共産党の最左翼だったように思いますけれども、その中に中村秀一郎という人が「高橋幸八郎近代社会成立史論批判」というのを書いているんですね。それを見て、私はもう高橋ゼミに入ろうと思っていたものですから、早速買って読んだわけです。半分、腹を立てながら読んだわけですが、ところが、超越的批判というより割合きちんとした論文だったという印象があります。中村先生が昭和22年に雑誌に書かれたものを収録したのです。昭和22年というと中村先生が24歳ですね。高橋先生の『近代社会成立史論』というのは、高橋さんが30歳前後で書かれているのです。それを24歳の中村先生が批判をして、それを20歳の私が読んで怒ったという、こういう話なんです。やっぱり当時の時代状況を示しているのかなという、みんな若い連中がそういうものを読んで、かっかしていたという、そういう時代状況だったと思います。

中村先生はその後、共産党の神山茂夫のブレンとして、それから、大変早熟な方で、本を何冊も書かれたということですね。特に中小企業研究では、『日本の中小企業問題』という、若手のマルクス主義の中小企業研究者にとってはバイブルと言われた本を書かれるんですね。これは昭和三十五年です。そして、その翌年から急旋回が始まります。そして、当時、中村先生は専修大学におられましたが、専修大学の紀要に、昭和三十六、七年には中堅企業論のもとになる論文を書かれております。昭和39年に東洋経済から『中堅企業論』を出されるんですね。そして、日本共産党からは除名処分をその前にもう受けていたわけですが、神奈川県の記事をおやりになった長洲さんとはほぼ同一時期に、このお二方が共産党を離れるという、いわゆる構造改革派ということですね。中堅企業論、これは大変見事な問題提起で、これは中村流企業家論ですね。それで早速、中村さんに連絡をとって、全く私は面識なかったのですけれども、連

絡をとって議論をして、それ以来すっかり親しくなったということで、共同研究者でベンチャー企業論というのを提起したわけです。

そのときの共同研究者の1人が平尾光司さんで、今年度中はまだ専修大学の教授でおられますけれども、ベンチャー企業論の問題提起した当時は長銀の調査部にいた方で、中村さんと平尾さんと私と3人で議論しながら、ベンチャー企業論という問題提起をしたわけでありました。平尾さんは後に長銀の副頭取になられて、その後、長銀総研の社長になられるわけでありましたけれども、平尾さんは調査マンとしてももう抜群のセンスを持った方で、それで、いろいろ書いておられたことがあったのですが、中村さんと平尾さんが中堅企業の研究を共同でやっておられて、中村さんと私がベンチャー企業の研究を京都でやっていて、そして、3人合流してやろうということになって、3人でやったということになるわけです。ベンチャー企業論も中堅企業論も、当然、マルクス経済学、特に日本共産党系の人たちからは、もうめちゃくちゃに批判をされたということがあるわけでありましたけれども、ベンチャー企業論を議論しながら、やはり企業家論というのをきちんともっとやるべきだろうという話になったわけでありました。

それから、共同研究で、企業家論と密接につながるのが内発的発展論なんです。内発的発展論ということになると、鶴見和子先生が問題提起をされております。鶴見先生の内発的発展論などを子細に読んでみると、やはり大塚史学を大分深く読み込んでおられるのです。こんなところでつながるのかなというふうに思ったわけでありました。実は鶴見先生と私は、中国の農村社会の調査研究ということでもう何年も共同研究者として動いたことがあるわけで、今、鳥根県立大学の学長をやっておられる宇野重昭先生、政治学者ですけれども、成蹊大学の学長をやった方ですけれども、その宇野先生が政治学、鶴見先生は社会学、私は経済学ということで、中国の農村社会の研究と、それも江蘇省というところにターゲットを絞ったわけです。

なぜ江蘇省かという、この下に書いてあります費孝通先生、この方が1930年代に書かれた本が、ヨーロッパでもう有名になってしまったわけです。これは江蘇省の開弦弓村という村の当時の農業と絹織物、そのかわりについての実証研究ですね、これがヨーロッパで非常に話題を呼んだということがあり、そして戦後は、あの四人組時代は当然、ブルジョア社会学者というので下放されてしまうのですけれども、趙紫陽、胡耀邦の際に復活をいたします。それで、費孝通先生は郷鎮企業論というのを問題提起するんですね。小城镇と郷鎮企業。つまり、放置しておく、中国の工業化の中で大都市集中が起こってしまう。北京とか上海にみんな集まってくる。これに対して費孝通先生は、農村に市場町をつくるということで、そこに農村工業を起こすと。市場町、これは流通の拠点ですね。市場町の周辺に農村工業を起こす。それで、農業を離れても土地は離れないという、こういう問題提起をされます。それを胡耀邦が取り上げて政策化するということなんです。それで郷鎮企業論ということ、言ってみれば分散的工業化なんです。

これは私は、中部ヨーロッパモデルではないかと思ったわけでありまして。つまりドイツのバーデン・ビュルテンベルクとか、あるいはフランスのローヌアルプ、スイス、オーストリア、ハンガリー、それからクロアチア、スロベニア、こういうところに共通の現象ですね。それから、イタリアですとロンバルディアですね。分散的工業化で、それで農村工業の展開です。これは実は大塚史学のテーゼともオーバーラップするわけでありましてけれども、それを費孝通先生が提起されたんですね。そういうことで、費孝通先生を全体のトップとして、日本側は7人の研究者のトップとして鶴見先生ということで、中国と日本の共同研究をやったことがあります。これが鶴見先生の内発的発展論に実はつながっているわけでありまして。

鶴見先生は、十二、三年前ですか、脳梗塞で倒れるのですが、体は完全に麻痺しております

が、思考力にかかわるような細胞と文字を識別する細胞というのは大丈夫だったんですね。だから研究は続けられたということがあるわけです。費孝通先生のところに私が、北京で行きましたら、鶴見先生はどうしてると言うから、これこれこうで、病気だということを教えたら、大変心配されたんです。そのときに、費孝通先生の自伝、立派な本なんですけど、これをお預かりして、鶴見先生に渡してくれということで、鶴見先生にお電話いたしました。倒れて、まだ伊豆でリハビリ中で入院中だったのですが、やはり電話では、「もう私、時間がないのよ」とおっしゃったんですね。寿命が尽きる前に仕事をまとめたという、こういう意味ですね。前よりテンポがもう速くなっているの、ちょっとびっくりしたぐらいですけども、結局、内発的発展論というのを仕上げたとは言えないと思いますが、あなたたちに任せますよということを宇野先生と私は言われていまして、これをまだいまだにきちんと果たしていないのですけれども、やはり担い手論、企業家論ということに非常に関心を持っておられたということがあるわけでありまして。

それから、シュンペーターとドラッカーですね。法政に企業家養成コースをつくったときに、やはりシュンペーターをもう一回きちんと読もうと思って、『経済発展の理論』を読み直し、それと同時に実は、「ウンターネーマー」という論文があるんです。これはドイツの『国家学事典』に実は載っていたものです。大塚先生が生前私に、シュンペーターとウエーバーの違いということをおっしゃられたのが頭に残っていたわけなんです。

ウエーバーの言う資本主義のエートスというのは、これは企業家にも労働者にも共通したものだ。しかし、シュンペーターの言う企業家のエートスというのは、これは企業家固有のものだ、そこを区別しなければいかんよというようなことを言われた記憶があるわけです。シュンペーターをちゃんとやろうということで、「ウンターネーマー」というのと、それからもう1

つは、時論として書かれたウンターネーマー論というのがあって、それと、戦時中にハーバードに移られてからの経済理論と企業家論との結びつきとか、4本論文をピックアップして、それでこれを翻訳したということがあるわけです。

その翻訳の過程で感じたのは、伊東光晴先生と根井雅弘さんが書かれたシュンペーターの紹介ですと、シュンペーターは書齋人だというふうにあっさり言うておられるけれども、本当にそうなんだろうか、書齋人とはとても思えない、時代に対する、現実に対する関心が極めて強いということがあるわけです。今、日経の「私の履歴書」に小宮隆太郎先生が書いておられますけれども、小宮先生もそうなんです。理論経済学者でありながら、現実への関心が物すごく強い方なんです。どうも、これは理論の方にはかえってそういう共通性があるんじゃないかというようにも思えます。シュンペーターは大変現実に強い関心があったということです。

それで、4つばかり論文を選んで翻訳して、たまたま一橋の関係の会合に出ていましたら、塩野谷祐一さんにお会いしたら、あの先生も、東洋経済新報社から聞いたのでしょうか、「あなたは随分変わったものを翻訳しているようですね」というふうに言われました。シュンペーターの本質というのは一体何かというと、若いころは『経済発展の理論』で、経済をリードしていくものはウンターネーマー、企業家であるというふうに言うておられたんです。それがだんだん変わってきて、景気循環論になると、大企業がイノベーションの担い手であるというふうに変わってくるんですね。ただ大企業というのは1つのシェル、殻のようなもので、その中に人が絶えず入れかわる、そういう存在として見ている。これがシュンペーターの大企業観なんです。現実の大企業とは全く違うわけです。

そして、戦後になると、シュンペーターはもうガルブレイスの議論と非常によく似てくるんです。大組織がイノベーターになるんだと、これは資金を持っているということ。しかし、そ

こでのやはりシュンペーターの大企業観というのは、現実と随分違うんじゃないかということ。それから、シュンペーターの翻訳をやっている気がつきました。最後の頃の論文の注にベンチャー・キャピタルというのが実は出てくるわけです。シュンペーターは1950年に亡くなっておりますが、あと10年長生きしたら彼の見解はもう一回変わったろうと思います。恐らく、イノベーションの担い手はもう一回アントレプレナーだろうと変わったと思えて仕方がないわけです。

それと関係するのがこのドラッカーなんです。ドラッカーは多分、学者としてシュンペーターに会った最後の人物だろうということです。ドラッカーは、シュンペーターが亡くなる3日前に、正確には2日前か3日前か、これはわかりません。わからないというのは、シュンペーターが夜亡くなっていて、何時ごろ亡くなったかわからないからという理由ですけれども、心臓麻痺で亡くなるわけです。

実は、ドラッカーのお父さんがシュンペーターの先生なんです。ドラッカーのお父さんは、ウィーン大学を出て、オーストリアの大蔵省の役人だったんです。それで若くしてウィーン大学で講義もしていた。そのときの学生がシュンペーターだったんです。ドラッカーのお父さんは晩年、カリフォルニアに住んだのです。当時ニューヨーク大学にいた息子のピーター・ドラッカーに手紙を出して、「シュンペーターに会いたい。ついては、会う段取りをとれ」ということで、それで、お父さん同席のもとでピーター・ドラッカーはシュンペーターに会っているんです。印象はよくなかったようですね。シュンペーターというのは、自己顕示欲が強いとか、それから、自分は非常にダンディーであって、女性に非常にもてるとか、えらい自信家だったようです。それに比べて自分の父親は非常に地味な男であるというので、どうも会合では、シュンペーターが一方的にしゃべって終わったようでもあります。しかし、ドラッカーに大変強い影響を与えたのはやはりシュンペーターなんです。



す。

ドラッカーも企業家論を展開している。アントレプレナーシップとイノベーションという本も出しています。そういうことで、ドラッカーは経営学者というよりも、文明評論家といえますか、そして優れた感覚を持っていたように思いますけれども、ドラッカーの評価等を見ても、シュンペーターというのは相当に鋭い現実感覚を持って時論を山のように書いている。時論を書こうと思えば、当然現実も知らざるを得ないということですね。

それで、シュンペーターの最後の論文に、注の中に、ベンチャー・キャピタルというのが出てくるわけです。シュンペーターはボストンにいたわけですが、ジョージ・ドリオが、戦後すぐボストンに、アメリカン・リサーチ・アンド・デベロップメントという、世界で初めての組織的なベンチャー・キャピタルを設立するんですね。ジョージ・ドリオというのは、フランスからの移民で、ハーバード・ビジネススクールの教授を14年間やって、ベンチャー・キャピタル論を論じていた人なんです。このアメリカン・リサーチ・アンド・デベロップメントというのは大成功したベンチャー・キャピタルだと言われております。

それは1956年にDECに投資をする。これが大成功だということで、これがボストンの経済を変えてしまうんですね。それで、我も我もと企業家が輩出する。それに投資するベンチャー・キャピタルがどんどんできてくる。それで1つの循環過程が起こってきて、そしてルート128ビジネスというクラスターが形成されてくるわけですね。したがって、ジョージ・ドリオは、ベンチャー・キャピタルの父と言われる方です。私は生前、彼に3回ばかり会って、いろいろ教えられたということがあります。

それから、ジョージ・コズメツキー、この人は2004年に亡くなられたのですが、亡くなる1カ月前にテキサスのオースティンで会いました。彼とも五、六回会っておりまして、IC 2研究所というのをつくって、アントレプレナー

の育成、研究に徹した人であります。コズメツキーはユダヤ系の人なんです、ロシア革命で両親が逃げてくる。日本経由でアメリカに渡ったんですが、日本経由のときにお母さんの胎内にいたと彼は言うておりましたけれども、天才的な経営学者だったと言っていいと思います。彼がやはり、アメリカのベンチャー・キャピタル業界を確立させた大人物だと思っております。彼の指導でネッド・ハイザーという人が全米ベンチャーキャピタル協会をつくるわけですね。これでアメリカのベンチャー・キャピタルが産業として確立して、経済の変革に物すごい影響を与えていくということで、ハイザーも、何度も私は会っています。今UCデービスのマーティン・ケニー教授が、コズメツキーとハイザーをフォローして、アメリカのベンチャー・キャピタリズムについて執筆しているところです。

日本の企業家では、私が非常にいろいろ親しく接した方というのは、亡くなった方では本田さんと立石さん、それから、まだご健在の方がいらっしゃる。稲盛さんは大体私と同年、それから千本さんは私より若いということになります。稲盛さんについては、実は竹下さんが大蔵大臣のときに、大蔵官僚が仕組んだのですが、竹下大蔵大臣を洗脳する会をつくらうというわけですね。森田一代議員、大平さんの娘婿でもう引退された方ですけれども、彼が中心となって、藤波官房長官とか、自民党からは綿貫さんとか、それから通産省からは小長次官とか、福川局長とか出てきて、おまえも出てこいというので、たしか私と飯田経夫さん、それから亡くなった学習院の香山健一さんなんかが出たのですが、あるとき稲盛さんが問題提起をされました、第二電電について。気の毒なぐらいに袋叩きにされたんです。彼を叩いたのは、その場にいたNECの関本さん、富士通の山本卓真さん、それから日立の三田さん、この3人が叩いたんですね。3人とも東大工学部卒の大企業の専門的経営者ですね。おまえみたいな鹿児島からのぼっと出の成り上がり者が何を言うのか、ドン・キホーテじゃないか、まさにそういう批判なん

ですね。

座が白けるのは当然なんですね。そこで、森田一さんが私に振ってきたんですね。何かコメントしろと。私は、人種が違うんじゃないかと。さっき批判した3人は大企業の専門的経営者として優秀な方だと。で、銘柄大学を出て大企業に入って、出世の階段を一步一步登って行って、組織人として成功した方じゃないかと。これに対して稲盛さんは、ベンチャーで成功された方だ、アントレプレナーだと、だから、あなた方とは人種が違うと言ったんですね。だから、批判をするのではなくて、あなた方は大企業なんだから少しバックアップしたらどうか(笑声)ということを行ったんですね。それで、終わりましたら、稲盛さんは私のところへ飛んできて、ありがとうございますとお礼を言われたんです。そのときに稲盛さんと組んで第二電電を成功させたのが千本さんで、今第3のベンチャーもやっておられるわけですね。そういうことで、稲盛さんとか千本さんについてもいろいろ思い出があるわけでありませう。

それから、私は、1997年に日本ベンチャー学会をつくった。これは長銀とか山一がつぶれた年であって、何で今ごろやるのかというわけですが、これは実は日本経済新聞が理解をしてくれまして、助けてくれたわけでありませう。それで、発起人をどうしようかというので、まず野田一夫さんに電話したんですね。きょう私が冒頭に言いました都立十五中の彼は私の先輩でありまして、沢登哲一校長の薫陶を受けた人なんですね。したがって、野田さんは私に会うと、君はおれの後輩だ、同じ先生に鍛えられた仲間だなあということをおっしゃるのです。大分個性が違いますけれども、(笑声)とにかく、バックアップするよと言って、すぐ発起人になる。そして、有馬朗人先生、それから江崎玲於奈、広中平祐、牧野昇と、こういう人たちをお願いをして、皆さん快く引き受けてくれて、それから西沢潤一先生ですね。皆さんやはりベンチャーが必要だという、まあ大御所が賛成してくれたものですから、それで日経がバックにつ

いたものですから、その立ち上げにお金が必要だったのですが、非常にうまくいった。今東京と関西、両方合わせて2,000名ぐらいの会員になっていますけれども、やはり運動という側面があるというのと、政策提言の必要性がある。だから、きょうお見えの吉川さんと一緒に、私もクラスター論というのをイノベーション部会というところで今やっております。

とにかく人口減少社会で、やはり何らかの意味で生産性を上げなければならない、イノベーションが必要だ。それから、恐らく金融危機が去って景気が回復した後の経済構造というのは、相当にさま変わりするはずだ、多分イノベーションがあちこちに起こって変化しているだろう。その場合の担い手というのは、必ずしも大企業本体ではなくて、企業家ではないか、アントレプレナーではないかということ、そういう意味で、企業家活動というのは、これからむしろ拡大傾向になるのではないかと。それから、トンネルを抜けた後の社会というのは、恐らく1つの社会デザインというのが必要になるだろうというわけですね。その場合にやはり、非営利セクターというのはかなり大きなセクターになるだろう、市場セクター、政府セクターのほかに。そこに出てくるのが社会企業家です。ソーシャル・アントレプレナーとか、シビック・アントレプレナーということです。その辺がどうなるかというのは今非常に興味深いことで、それはもうこれから研究しようという、研究課題としてここでお示したわけでありませう。

これで私の話を終わりにいたしたいと思ひます。どうもありがとうございます。(拍手)